

AJ フォーラム 25

鬼怒川水害と外国人支援 —— 常総市における N P O の活動事例 ——

日時：2016 年 5 月 24 日（火）10：45～12：15

場所：世田谷キャンパス メイプルセンチュリーホール 4 階 中教室（M401）

講師：横田 能洋（認定 NPO 法人 茨城 NPO センター・コモンズ 代表理事）

コーディネーター：柴田 徳文（政経学部）

私は茨城県常総市から来ました。常総市は 2015 年 9 月 10 日、関東東北豪雨災害の際に鬼怒川の堤防が決壊し約 5 千世帯が床上浸水するなど大きな水害に遭いました。私はその被害に遭われた方の生活の再建と地域の復興に取り組んでいます。また私は常総市に多く暮らしている日系ブラジル人など日本語を母語としない方々の定住支援に関する活動も 2009 年からしていますのでその話もさせていただきます。常総市は人口が 6 万 5 千人ほどですが人口の約 6% が外国籍の方々と、多くは市内の食品製造業で働いています。

わたしが働いているのは通常の会社ではなく、NPO 法人という組織で 1998 年に仲間が集い設立しました。それまで 7 年間は違う団体でサラリーマンをしていました。NPO(民間非営利組織)というのは、ボランティアグループと営利会社の間にあるような組織です。ボランティアとは自発的に無償で誰かのために活動する個人です。それが組織になるとボランティアグループとなりますが、基本的には無償で自分たちが出来る範囲で活動します。けれども活動していると自分たちの力量だけでは対応できないような社会の課題に直面することがあります。その時に「それはできない」「行政にやらせてもらおう」と考えることもありますが、行政も制度がないから、予算がないからと動かないことがあります。それならば自分たちでやるしかない、広く地域に協力者を呼びかけ、資金、人、情報を集め市民の力で課題解決のための事業を立ち上げることになります。そのような時に NPO という組織を作ります。私は NPO は課題解決のために共感によって、人とお金を集める道具だと思っています。

日本では営利とはお金儲けと思う方が多いのですが少し違います。営利とは利益を分配することです。非営利は分配しない、つまり事業をしてお金が残ったらメンバーに配らず次の活動に充てます。そこが会社と NPO の違いです。営利を目的とする組織は利益を上げることが目的になるので利益が見込めない分野には取り組みにくいのですが、NPO は課題解決が目的なので取り組みます。資金が足りない部分は寄付や助成金、ボランティアの力でカバーします。別の言い方をすると、NPO として事業をすると、皆で一緒にやろうと声を掛け、何か社会の役に立ちたいという人の参加の機会を作ることができ人も雇えます。ボランティアグループの限界、営利組織の限界を NPO は超えられるのです。

なぜ私がこのような仕事をしているかですが、最初のきっかけは弟が1歳の時に聴覚障害になったことです。それで何となく大学の時にボランティアサークルに入りました。そこで手話を習ったり、障害者施設の訪問などをしました。その時に、障害者だから仕事に就けない、結婚もできない、などいろいろな生きにくさや差別があることに気づきました。学生の時にアメリカで行われた世界ろうあ者会議に参加する機会がありました。会議では話している内容がリアルタイムで字幕で映され、公衆電話には聴覚障害者のためにキーボードがあってそれで文字を入力するとオペレーターが音声に変えて相手に伝えるサービスも目にしました。国によって情報保障に大きな差があることに衝撃を受けました。技術の問題ではなく、人々の意識、制度の違いだと思いました。私は少数の立場の人が諦めたり我慢するのではなく、人として当たり前の暮らしができるように社会を変える、そのような仕事がしたいと思うようになりました。

学生時代にボランティアをしていて、多くの人が就職すると仕事だけになりボランティアから離れてしまう。仕事をしながらでもボランティアができるような社会にならないだろうか、さらには社会貢献に専念しつつ生活も成り立つというような生き方ができないのかと考えていました。そんな中でアメリカから日本にNPOという仕組み、制度が導入され、これだと思い人生をかけてみることにしたのです。

NPOはそれぞれ組織の使命(ミッション)を掲げて活動します。私の属する茨城NPOセンター・コモンズのミッションは次のようになっています。

コモンズのミッション

障害、病気、など様々なことで困った人が、
十分な行政のサポートが受けられないとき、
あきらめるのではなく、
自分たちで必要なサービスをつくったり、
社会に働きかけて状況を改善する、
そういう活動が、地域に増えるよう、
人を励まし、いろいろな市民・組織をつなぎ
暮らしやすい地域社会を自分たちでつくっていく

有償で収益をあげる＝営利？



そんな仕事をしてきた自分がブラジルの方と係わるようになったきっかけは、自分の住む常総市がブラジル人の集住地域だったこと、そして2008年にリーマンショックという大きな出来事があったからです。急に世界経済が悪化し多くの企業が経営難に陥りました。そこで「派遣切り」と言われる労働者の解雇が大規模に行われました。その時に真っ先に解雇されたのが「出稼ぎ」に来ていた日系ブラジル人の方たちでした。当時常総市内には3つのブラジル人学校がありそこではポルトガル語でブラジル式の授業が行われていました。親が仕事をなくすと学費が払えなくなり、公立小中学校にブラジル学校の子どもがなだれ込んできました。中には不就学になる子もいました。そうしたことが気になり、派遣会社、教会、日本語教室、ハローワーク、教育委員会で情報を収集し、皆で集まって外国とつながる子どもの教育について何ができるか考える会を開きました。それがきっかけとなり、コモンズは、国や県から外国人の再就職支援のための相談事業、日本語教育事業、

子どもの就学支援事業を受託して行うようになりました。まず課題に気づいたら調べてアクションを起こす。するとそれが事業につながり、お金は後から付いてくるのです。これが NPO 的な事業の立ち上げ方です。

2010 年から 3 年間、茨城県との協働事業で行った外国人就労就学サポートセンターでは、履歴書の書き方や労働保険など日本で仕事をして生活していくために必要なことを通訳を交えて伝えたり、介護の仕事にもつけるようにヘルパー講座も企画しました。

外国とつながる子どもの学習に関してはたくさんの課題があります。

外国人児童生徒の学習問題

学校文化が異なることによるショック
学校で、教師の話がわからず苦勞する
家では母国語なので日本語の習得が遅い
家で兄弟の子守をして不就学になることもある
親が学校のプリントを読めず情報が不足
中学生から来日すると学習が追いつかない
義務教育ではないので不就学が放置される
高校進学率が低い
一番の問題は、「将来の夢」を持ちにくいこと

中学生のアフタースクール



茨城では、大人向けの日本語教室はたくさんありますが、子どもの学習支援をしているところはほとんどなく、様々な活動を他県の事例を参考にしながら立ち上げていきました。入学前のプレスクール、放課後のアフタースクール、高校進学のための通訳つきのガイダンスの開催などです。これらは県の委託事業が終わってからも寄付や助成金を得ながら継続してきました。そんな中で 2015 年の水害に見舞われたのです。

関東東北豪雨災害とは以下のような災害でした。

水害による被害状況 常総市全体

項目	状況など
人的被害	死亡2名、重症3名、中等症21名、軽症20名
住家被害	全壊53、大規模半壊1,575、半壊3,475、床上浸水148、床下浸水3,072
救助者	ヘリによる救助者数 1,339人 地上部隊による救助者数 2,919人
避難指示	① 避難指示 11,230世帯、31,398人 ② 避難勧告 990世帯、2,775人 (9月24日16時時点)
避難者	避難者数 7,032人 (9月11日7時時点・下妻市も含む)

参考 国土交通省関東地方整備局HP
茨城県災害対策本部HP

水害直後の状況



南北に長い常総市の真ん中のあたりで午後1時に鬼怒川の堤防が決壊しました。私たちはそこから10キロ南にいて防災無線でそのことを知りました。その時すぐに逃げた人は車は助かりました。多くの人は水が来ないだろうと動かずにいました。近くに水害時に避難できる場所が決まっていなかったのも避難が遅れた理由です。ところが浸水は思わぬところから始まりました。街中の水路の水位が上昇し雨水溝を逆流した水が地下から溢れ出したのです。それで車も動かせなくなり皆が家に閉じ込められました。夜には決壊地点から来た水が市の東部全体に広がり、低い土地では2メートル近く浸水しました。

私の自宅は少しだけ土地が高かったので奇跡的に床下浸水ですみました。けれどコモンズの事務所は3日間、1メートルの泥水につかったことで教材も機材も殆どを処分することになってしまいました。車も3台廃車になりました。



公園がゴミ置場に



家族を避難させた後、私は家にとどまり、被災地の中の状況を全国のNPOの仲間にメールで発信することを始めました。災害用のトイレなど防災グッズや食料の備蓄が役立ちました。近所の多くの人は電気も水もトイレも使えない家にはいられないのでボートやヘリで救助され避難所などに入りました。

避難所といってもおにぎりだけのような厳しい状況で多くの人は水が引くと家を片付けるために戻ってきました。そして1階のものが殆どダメになっている状況にショックを受けました。台所もトイレも風呂も使えない家で2階に寝泊まりする生活を想像してみてください。

さらに外国籍の住民の方は、情報が得にくいという問題にも直面しました。罹災証明の申請など行政の手続きの事、車の廃車、保険の確認などわからないことだらけです。外国人の方が多く勤めている企業の多くは水害とは関係なく稼働していたので、アパートに住めなくなった人は避難所から早朝深夜、工場に行っていました。その事情を知らない日本人の被災者が「夜中にごそごそるさい」と言って少しトラブルが起きていました。

このような状況で何ができるか3日間考えました。そして立ち上げたのが「助け合いセンター juntos」というプロジェクトです。

水害の復旧で立ち上げた活動

活動分野	活動内容
J (情報)	『JUNTOS通信』や多言語ラジオ番組の制作
U (運転)	ボランティアによる移動サービス、カーシェア
N (直し隊)	住宅の改修支援、空家を地域の活動拠点として再生
T (届け隊)	支援物資を自宅や引っ越し先に届けつつ見守り
O (お話し隊)	住民が話し合うサロンを開き住民の声を復興計画に反映
S (住み隊)	孤立しがちな人が、地元で共に暮らせ「福祉長屋」づくり
(学習支援)	被災した中学生の高校受験のための無料塾



大量のボランティアのコーディネートは社会福祉協議会が立ち上げる災害ボランティアセンターに任せ、私は外国人とのつながりを生かして、多言語で被災者向けの情報提供や個別の相談、支援を行うことにしました。また現地で何が必要かを調べて全国に発信し、泥かき以外の活動をしたい団体と現地のニーズをコーディネートすることにしました。財源は寄付を募れば集まると考えていましたし実際に数千万円が集まり、それでスタッフを配置したり支援のための機材を購入することができました。必要と思われることは次々に事業化しました。情報紙の発行、多言語でのラジオ番組作り、車をなくした人のためのカーシェア（車の貸し出し）、通院や通学の移動に困る人のための送迎ボランティア、弁護士や建築士など専門家と連携した相談会、様々な団体との協力による避難所以外での炊き出し、高校受験を控えた子どものための無料塾、空き家の改修などです。これらの活動にブラジル、フィリピン、スリランカ、アメリカ、中国など多様な国籍の方と一緒に取り組んでできました。Juntos とは「一緒に」という意味です。そのお陰で、juntos 周辺の人々の外国人住民への意識が随分フレンドリーに変わってきました。

災害時の外国人支援ということで沢山の取材を受けました。いろいろな情報を翻訳したり、多言語で災害時の資料を用意することも必要な事ですが、それよりも大事な事があります。平時から顔見知りになり、いざという時に声を掛け合える関係を作る事です。それがあれば翻訳機がなくても助け合えます。

水害で直面する 8 つの課題

1. 避難 どこに、いつ、逃げればいいのかわからない
2. 大量の災害ゴミをどこに持って行くか
3. 公的制度や義援金配分では改修費や家財購入費を賄えない
4. 家の解体、空家化、人口流出、人のつながりが壊れる
5. 商店など個人事業が廃業に追い込まれアパート改修も進まず
6. 公園や公民館など公共施設が使えず、人が集まって話せない
7. 孤独、引きこもり、生きがい喪失を放置すると心の問題が悪化
8. 辛さが理解されない、忘れられた感覚が心を重くする

空家を修復して青少年の居場所を作る



水害は様々な困難をもたらします。運良く保険が支給され家が直せても、周りにいた人が街を去ったり、今まで通えていた場所がなくなってしまうたり、被災の差や家を直せたかどうかの差などで住民の間に心の温度差が生まれます。喪失感や常総のことは忘れられているという虚しさもあります。そんな人たちが前を向けるよう、皆で話せるサロンを開いたり、ボランティアの手で空き家を再生したり、市外に避難している人を訪問したり、様々な活動をボランティアの協力で juntos は続けています。

災害は大変なことでしたが、私たちは多くのことを学びました。辛い状況で立ち上がらないといけない時にボランティアの応援がどれほど励みになるか、いざという時は近所で助け合わないといけないこと、災害には備えが必要ということなどです。これを機に地域皆で防災に取り組んだり、言葉の壁を超えて交流したり、前よりも住みやすい街にするために私たちは活動していきます。